

---

# 金の成る機

悲劇のM

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

金の成る機

### 【Nコード】

N5892E

### 【作者名】

悲劇のM

### 【あらすじ】

自分が得をすると誰かが損をする。そんな機械があったら、あなたは使いますか？

「はぁ・・・」

ため息をつく青年の名は堺裕也。25歳独身、フリーターだ。彼は今、非常に金に困っている。

既に親元を離れ生活している故、家賃・光熱費・食費などをすべて8万円という月給の中から出しているからだ。手元に金は残らず、預金が少しずつ減っていった。

今更親に泣きつくなんて出来るはずもなく、貯金通帳に記された片手で数えられる『0』を見て、一人ため息をついていた。

「金の成る木でも無えかな」

しかし、そんな物あるわけなかった。金の成る木なんてあったら真面目に働く奴なんて一人もいなくなる。裕也は己自信を納得させた後、通帳をポケットにねじ込んで今月の家賃の為の金を下ろしに銀行へ向かった。

「はぁ~~~~」

今回のため息は、前回のそれと比べ物にならなかった。

それもそのはず、遂に預金残高が4桁になったからだ。残されたものといえば、バイトを2重に掛け持ちするか、親に泣きつくかの選択肢だった。

考えても仕方ないので、裕也はその辺を散歩する事にした。

「ああゝあ、やっぱり親頼るか」

今日何度目かのため息をついた。

「ってあれ、どこだここ？」

気付けば、フラフラと歩くうちに、裕也は町外れの林まで来ていた。既に日も沈み、夜鳥が鳴いて、いかにも何か出そうな雰囲気漂っている。仕方無しに、裕也は一方方向に歩いていった。

しばらく歩くと、何か機械音のような音が聞こえてきた。何だろうと思ひ音のする方に行った。

そこには、自動販売機のような機械があった。縦に少し長く、下の方には扉のついた何かの取り出し口があった。

そして怪しげな大きいボタンとメーターのような物が付いていた。コレは何なのだろうかと、裕也の好奇心が掻き立てられる。

裕也は、怪しげなボタンを押した。

すると、機械から音声が発せられた。

『引き出す金額を言ってください』

突然の事に裕也はポカンとした。引き出す金額とは何だ、と。

裕也は思いつくままに「10万」と言った。すると、メーターがグルグルと動き出し、>>100000<<と表示された。

数秒後、ピコーンと鳴ったかと思うと取り出し口のような所に何かが落ちてきた。早速裕也は取り出し口に手を突っ込んだ。

そこには、紙のような物が何枚もあった。その紙を見ると、裕也は自分の目を疑うことになる。

それは、なんと10枚の1万円札だったのだ。

「うそ、マジか……!？」

月明かりに重ねてみる。透かしは入っていた。どうやら本物らしい。「何なんだ、この機械」

裕也は気味が悪くなり、10万円をそのまま置いてその場から立ち去った。

翌日、裕也は一人、アパートの1室で後悔していた。他でもない、

昨日の機械の事だ。

金がいくらでも引き出せる機械だ。働かなくたって食べられる。それどころか、思いつくかぎりの贅沢が出来る。

いくら引き出したって誰も自分がやったなどと気付かないかもしれない。もう一度あの場所へ行こうと、裕也は身支度をした。金を沢山いれるための大きい鞆も持った。

アパートの1階につくと、裕也はいつもの癖で郵便受けを開いた。誰かから手紙などが届くわけではない。親の仕送りの何年か前に止まっているのだが、もしかしたら今の自分の状況を察して親が仕送りしてくれてたかもしれない、と情け無い期待からだった。

だが、郵便受けの中には封筒があった。

誰からだろうと思いつつ差出人の名前を探したが、無い。親からの仕送りの時は必ず母の名前で来るのだが。

裕也はとりあえず封筒を破いた。中には綺麗に4つ折りにされた手紙が1枚あるだけだ。

裕也はその手紙を黙読した。手紙には機械的な文字でこう書かれていた。

『私の発明した装置には満足したかい？ あれはいくらでも金を引き出せる装置だ。君はその装置の被験者に1億5千万人の中から選ばれた。だから、いくら引き出しても構わない。しかし、そんなむしのいい話があると思うかね？ あの装置で引き出した金のツケは君の子孫に回ってくる。だが、子孫に回ってくるだけで、君が損をする事は無い。いくら引き出そうが君の自由だが、子孫にツケが回ってくる事は忘れないで使用してくれたまえ。』

裕也はその内容をすぐに理解した。要するに、引き出せば引き出す程自分の孫やひ孫が迷惑するという事だ。

だが、裕也にとってそんなことどうでもよかった。鞆を持ち直して、林へと向かう。

やはりそこには例の機械があつた。

「悪く思つなよ……」

子孫に対してか、そんなことを言つた後、機械に向かつて思いつく限りの金額を言い渡した。自分は今から億万長者だ。働かずに贅沢三昧の生活が待ってるんだと思うと、裕也の心は躍つた。

ボタンを押し、金額を言つた。

だが、おかしい。

機械が反応しないのだ。昨日だったらすぐに札が出てきたのに。

裕也は取り出し口に顔を突っ込んでみた。刹那

取り出し口の上部からギロチンが落ち、裕也の頭部と胴体を切り離した。鮮血が飛沫となって機械を血に染めた。

そこには恰幅の良い男が高そうなイスに座していた。その男に部下らしき人物が言い寄る。

「総理、あんな政策本当にいいのでしょうか？」

「欲張り者なんかがいるから日本はダメになるんだ、君が口出しするんじゃないよ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5892e/>

---

金の成る機

2010年11月18日02時55分発行